



プラネティストが行く 12

危機にあっても正々堂々 カフカースのしたたかさ

中村 繁夫

写真・桃井和馬

中央アジア諸国が旧ソ連から独立した直後、カフカース牧羊犬を日本に連れて帰ったことがある。税関で動物検疫を受けたときに、日本では1頭しかいないと言われた希少種である。ぬいぐるみのような子犬が1年も経ったら80^キの巨大犬に変身してしまった。以来、「ボス」(カフカース牧羊犬の名前)との格闘の日々が始まった。近所の人を噛んだ時には警察沙汰にまで発展した。我が家の火薬庫であったが、生まれた場所が場所だけに、たくましさがあった。

昨年、モリブデンやマンガンの開発調査のためにカフカース地方に行った。カフカースは黒海とカスピ海に挟まれたカフカース山脈と、それを取り囲む低地からなる。山脈を境界として北はロシア連邦領のチェチェン、北オセチア、イングーシなど、南は旧ソ連から独立した、アゼルバイジャン、グルジア、アルメニアからなる。

北アルメニアのモリブデン鉱山の調査後、カフカース山脈を越えてグルジアの首都トビリシに抜けた。強行軍だったが、ロシアがアフガン戦争のために舗装したと思われる軍用道路が山脈を縦断していたので助かった。車の中ではグルジアの歌姫と呼ばれているニーナ・チハイゼ(NINO CHKHEIDZE)のやるせない歌声が、オーディオから流れていた。荒削りなグルジア男の心を掻きむしるような旋律である。

グルジアのイメージは、欧州という感じで、ロシア的なスラブ色や中央アジアのイスラム色とは少し違った趣がある。彼らの風貌も独特で目鼻立ちがはっきりしており、激しい性格が表情に溢れている印象が強い。スターリンやシユワルナゼといった著名な政治家を

輩出し、農業と工業のバランスが取れていたのが政治と経済がかみ合って安定していた。ところが、旧ソ連の崩壊の後は見ても無残な状況が続いている。最大の原因は国内紛争による経済の疲弊だが、NATO加盟を目指すグルジア政府と、ロシアとの軋轢が深刻だ。カフカースはカスピ海から黒海への石油の輸送ルートでもあり地政学的リスクの影響があるからだ。

グルジアに隣接する地域だけでも10の自治区があり、グルジア国内の3地域では国内紛争が起こっている。一番深刻なのが、北西部のアブハジア紛争である。91年にグルジアはロシアから独立するが、当時のアブハジア自治区のイスラム住民は、ロシアへの帰属を要求した。その結果、追い出されたアブハジアのグルジア人20万人は国内難民となり、現在もまだ5万人以上の難民問題が解決されていない。他にも、北京五輪中に勃発した南オセチア紛争がある。

私がカフカース山脈を越えてグルジアに入国したその日に、ロシア空軍がグルジアの偵察機をアブハジアで撃墜したというニュースが飛び込んできた。幸い、事件は拡大しなかったが、いずれは本格的な戦闘に発展すると予見される。

カフカース地方は日本人の想像を絶する複雑さに満ちている。文化も歴史も人種も、我々とは違いすぎるために、正直なところ、何がどうなっているのか理解できない。しかし、そうした「手に負えない」状況のなかで長年暮らしているのが、カフカース地方の人々だ。グルジア人などには、「したたかさ」がある。決して「ずる賢い」ということではなく、正々堂々とした誇りが感じられる。交渉をしても、一筋縄では行かない相手だ。これはカフカースの複雑な環境が形成させた性格だろう。日本人に一番欠けている部分だ。「100年に一度の危機」と、慌てふためく日本人を見てみると、あらためてカフカース人の「したたかさ」が思い出される。

〔なかもら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンストマテリアルジャパン（AMJ）社長。近著に「2次会は出るな！」（フォレスト出版）。「ももい・かずま」1962年生まれ。フォトジャーナリスト。世界140カ国を取材し、現代文明を表現する。第32回太陽賞受賞。



アブハジア紛争のため家を追われたグルジア人の避難民家族（前頁）。

グルジア国内にあるアブハジア自治区への検問所。警備にあたっているのはロシア兵だった（当頁）。